

「高大接続改革実行プラン」を 高校現場はどう考えるか

東京都立西高校校長

宮本久也^{ひさや}

岡山県立和気閑谷高校校長

香山真一^{まこと}

文部科学省は、2015年1月、高校教育、大学教育、大学入試の一体的な改革を進めるために、「高大接続改革実行プラン」を策定した。そして、このプランの実現に向けた具体的な方策について検討する「高大接続システム改革会議」を発足させた。

「高大接続システム改革会議」の委員には、現場の公立高校を代表して2人の校長が名を連ねている。その2人に、実行プランをどう受け止めたのか、話を聞いた。

実行プランが示した日程に

高校現場は対応できるか？

香山 文部科学省が高校教育改革、大学教育改革、大学入試改革の三位一体の改革を打ち出したことについて、私は基本的には賛成です。

日本でも、課題解決力を持ち、自律的に活動できる若者を育成するために、改革が必要であることについては、多くの教育関係者が共通に

認識していることだと思います。

ただし、そうした改革は、手順を踏んで進めていかないと、現場の混乱を招く恐れがあります。例えば、センター試験に代わって導入が予定されている「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」では、「思考力・判断力・表現力等の能力を中心に評価」するとしています。現行課程でも、学力の3要素の1つとして、思考力・判断力・表現力等を育むことが明記され、アク

「高大接続改革実行プラン」の狙いと内容

◎中央教育審議会は2014年12月、「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学希望者選抜の一体的改革について（答申）」を提出。これを受け、文部科学省は15年1月、「高大接続改革実行プラン」を策定し、改革への道筋とスケジュールを示した。本プランの狙いは、高校教育、大学教育、大学入試を一体的に改革し、「知識・技能」のみならず、「知識・技能を活用して、自ら課題を発見し、その解決に向けて探究し、成果等を表現するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力」といった真の学力を育成・評価するための体制の構築にある。高校教育についての具体的な内容としては、学習指導要領の抜本的な見直しや、主体的・協働的な学びを重視した教育の展開、大学教育については、アクティブ・ラーニングの導入やSDの義務化などによる大学教育の質的転換、学生の学修成果の把握・評価の推進などがある。高校教育の質の維持・向上、及び生徒の学習改善を目的とした「高等学校基礎学力テスト（仮称）」や、センター試験に代わり大学進学希望者の学力を測る「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の導入も打ち出された。

PROFILE



東京都立西高校校長

宮本久也

みやもと・ひさや

◎教職歴 36 年。同校に赴任して 4 年目。東京都教育庁指導部指導企画課長等を経て、現職。



岡山県立和気閑谷高校校長

香山真一

こうやま・しんいち

◎教職歴 34 年。同校に赴任して 3 年目。岡山県立岡山操山高校教諭等を経て、現職。

タイプ・ラーニングなどに取り組む高校も増えてきました。しかし、これらの力をどのように生徒に付けさせるかについては、まだ試行段階です。ですから、まず、高校現場が生徒の思考力・判断力・表現力等を育むための手法を確立し、その手法を普及させた上で、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」を導入するのが、本来の手順ではないかと思っています。

ところが、国は 2020 年度導入を目標に掲げています。「高大接続システム改革会議」において、私は高校の状況を知っている委員として、高校側の要望を伝えていきますが、それでも 20 年度からの実施が決定された場合、高校はその日程に合わせた対応を迫られることになります。

宮本 香山先生が言われるように、現行課程でも思考力や判断力などの育成を目指すことが示されていますが、まだ段階的なものです。ですから、大学入試も、現行課程で目指す学力を、生徒がきちんと身に付けているかどうかを測るものであってほしいと思います。そして、次期学習指導要領が、本格的に思考力・判断力・表現力等を養うことを中心に据えた内容になった時に、大学入試もそれに沿ったものに変えていく。そうした段階を踏んで、改革を進めるべきです。

ところが、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」を 20 年度から実施した場合、現行課程

の半ばで新しい形態の入試が導入されることとなります。そうすると、「今の学習指導要領で付けさせることが出来る力」と「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）で求められる力」との間に、不整合が起きるのではないかと不安があります。

もう 1 つの危惧は、大学入試改革自体はよしとして、大学側がそれに対応できるだろうかということです。「高大接続改革実行プラン」では、各大学が実施する個別入試についても、知識や技能だけを測る試験ではなく、「多面的・総合的な評価への転換を図る」ことが示されています。そのために「一般入試、推薦入試、AO 入試の区分を廃止した新たなルールを構築する」とあります。つまり、AO 入試で行われている小論文やプレゼンテーション、集団討論などの試験を通じて、受験生の学力を評価する入試形式を、今後は標準にしていこうということだと思います。

ただし、そうした入試では、受験生一人ひとりの学力を丁寧に見ていくことになるため、時間が掛かりますし、人的なパワーも必要です。私を含めて多くの高校の先生方は、「本当に大学はそうした入試を全面的に実施できるのだろうか」と思っていることでしょう。「A 大学は多面的・総合的に評価する入試に転換したが、B 大学では従来のまま」というのでは、高校は対応に苦慮してしまいます。

授業デザインの変更が 求められている

香山 私も、大学が多面的・総合的に評価する入試を全面的に導入するのは難しいと考えています。全体の入学定員の30～50%にとどまるかもしれませんが。そうすると、多面的・総合的に評価する入試と、従来の一般入試的な入試のどちらで生徒が受験することになったとしても対応できるように、高校は授業のデザインを変えていく必要があると思います。

また、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」では、通常の「教科型」の問題に加えて、「合教科型」や「総合型」での出題も検討事項となっています。現段階では問題内容は明確ではありませんが、例えば、統計やグラフに示された数値を見ながら、日本語や英語で文章を書くというように、各教科で培ってきた知識・技能を総合的に活用する力が求められる出題が予想されます。そうした知識・技能を横断的に活用しながら課題を解決していく力を身に付けるためには、「総合的な学習の時間」をどう活用するかが鍵になると思います。

宮本 「多面的・総合的な評価」や「知識・技能の活用力」を問う入試に対応できる学力を生徒に身に付けさせるためには、授業で言語活動を行う場面を意識的に組み込むことが大切です。本校でも、数学の授業において、生徒同士



で小グループになり、話し合いながら問題を解き、その解答を全体発表させるといった活動を行っています。言語活動は、数学でも英語でも保健体育でも、あらゆる教科で取り入れることが可能です。

しかし、多くの教師は、従来の授業デザインや指導法からなかなか抜け出せていません。先進校の事例などを参考にしながら、学校全体として授業改善に取り組む必要があるでしょう。

「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の 可能性と危うさ

宮本 「高大接続改革実行プラン」では、高校での学習の達成度を測ることを目的とした「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の導入も予定されています。このテストによって、生徒が自分の学習の状況を客観的に把握して学習改善に役立てたり、教師がテストの結果を分析して指導改善に生かしたりといったことが出来るならば、非常に意味のあるテストになると思います。

一方で心配なのは、「高大接続改革実行プラン」で、大学は入試の際、調査書に「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の結果記入欄を設けるなどして、テストの結果を選抜の資料に用いることも可能としていることです。

また、実施時期や学年については、2年生の夏から秋以降に複数回実施することも検討されています。もしテストの結果が入学者選抜の資料に用いられるとなれば、それは実質的な入試の前倒しを意味しています。そうすると、教師も生徒も、試験対策をせざるを得ません。2年生の2学期は、生徒が文化祭などの学校行事に打ち込み、部活動では中心メンバーとして活躍するなど、高校生活が最も充実する時期です。生徒は授業だけでは得られない様々な経験をします。その貴重な時期が、試験対策一色で潰されてしまうとなれば、高校教育全体をゆがめて

しまうことになりかねません。ですから「高等学校基礎学力テスト（仮称）」は、あくまでも生徒のその時点での学習の達成度を測ることを目的としたものとするべきです。

香山 同感です。私は「高等学校基礎学力テスト（仮称）」は、小・中学校段階の基本的な問題から難度の高い問題まで、出題の範囲を広げることで、どの学力層の生徒が受けても、今後の学習の目安になるものにするのが大事だと思います。そして、テストを受けた結果、「自分は中学2年生の時のこの単元でつまづいたから数学が苦手になったんだな」といったことが明らかになれば、教師も生徒も今後の手立てが見ええます。何につまづいているのかに気付かせ、学習改善に生かすための仕組みとして活用できれば、学習につまづいてしまった生徒にとって、学ぶ喜びを取り戻す機会になるでしょう。そのためにも、このテストを進学时や就職時の選抜の資料として用いてほしくはありません。

高校と大学が連携して
生徒、学生を育んでいく

宮本 最後に、三位一体の改革の柱の1つである大学教育改革についてですが、本校の生徒を見てみると、昔の高校生と比べて、非常に厳しく大学を評価していると感じます。「大学にさえ合格すれば、その先の人生は何とかなる」と考えている生徒はわずかで、「この大学や学部

は、自分にどのような力を付けさせてくれるのか」という視点で志望校を選んでいきます。進学するだけの価値があると判断した大学は受験しますが、そうではない大学は、初めから受験対象から外しています。そのため、併願校数とはとも少なくなりました。そうした意識の変化は、本校の生徒に限ったものではなく、全国的な傾向ではないかと思えます。そうであるならば、大学側もうかうかとしてはいられなくなります。つまり、大学に教育の質的転換を促すためには、生徒を大学に送り出す高校現場や生徒自身が、大学の教育の質を厳しく問うことが、非常に有効なのではないでしょうか。

香山 これからは、自分が入学したい大学が国内になれば、海外の大学を選択するという時代になるでしょう。日本の大学は、どこも強い危機感を抱いていると感じます。重要なことは、高校と大学が同じ問題意識を共有しながら、生徒や学生の育成に共に取り組んでいくことです。そうした動きが全国の高校と大学に広がっていけば、日本の教育は大きく変わるのではないのでしょうか。

私は、教育改革を進める際には、教育における不易の部分に立ち戻り、育てたい生徒像、学生像を見つめ直すことが大切になると思いま
す。『論語』の中に「学びて思わざれば則ち罔
し。思いて学ばざれば則ち殆し」という章句が
あります。「学んでも自分で考えることをしな

ければ、他人の意見に絡め取られてしまうことになる。また、いくら自分で考えても、学ぶことをおろそかにしては危険である」といった意味です。主体性を持って自分で考えることと、知識・技能を得ることの両方が重要である」と説いた言葉です。つまり、これからの時代に必要なとされる学力とは、実は孔子の時代から重視されていたことなのです。だから私は、今回の教育改革では、全く新しいことが求められているわけではないと捉えています。

宮本 その通りだと思います。日本の教育が培ってきた集団教育は今後も有効だと、私は考えています。特に高校現場の場合、様々な資質や性格を持つ生徒が、3年間、同じ教室で学びます。そうした集団の中で、他者と協力しながら物事を成し遂げていく力や、相手を尊重しながら自分の意見を相手に伝えていく力などを身に付けていきます。今回の教育改革では、「主体性を持って多様な人々と協働することを通して、喜びや糧を得ていくことが出来るようにすること」が目指すべき姿として掲げられています。ですが、まさに高校の教室は、これまでも今後とも、そうした力を養う場であるといえます。

香山先生が言われたように、教育改革だからといって、特別に身構えることはありません。原点に立ち戻って、学校の普遍的な役割や育てたい生徒像を考えれば、やるべきことが見えてくるのだと思います。